時事新報

避暑旅行

昨今暑氣も盛にして追ひ〳〵避暑旅行の節とありたるに就ては函根伊香保大磯興津等の温泉幷に海水浴は例年の通り繁昌を極むるとならん近來の流行は上流の官吏を始め所謂紳士紳商と稱する輩の餘風に傳染して一般に奢侈贅澤に流れ其弊習も少なからざれども元來避暑の目的は都下の紅塵炎熱を避けて山間海濱の地に清涼の空氣を呼吸し以て平生の勞を慰するものあれば常に繁雜なる事に鞅掌する人々に於ては數周間の遊浴、大に心身を休息して健康を養ふの利益少なからず避暑の事敢て非難なきのみか社會の人事次第に繁忙に赴き人の心身を勞するみと多きに隨ひ之を休息するの方便として寧ろ必要を感ずるみとならんなれども我輩は其旅行者が從來の如く比隣曾ならざる山海の邊に逍遙して數周間の閑靜を偸む其閑日月を利用して大に壯遊を試み心身を爽快にするを同時に更に利益を收めんみとを希望するものなり近來鐵道の便利開けて往來甚だ自由なれども暑中の休暇に遠方の旅行を企る者なく例へば東京の人なれば西は函根を限り東北は日光に止まり夫れより以外舞子の景色、松嶋の眺めの如きは未だ一般に都人士の談に上らず況んや九州北海道の如きに於てをや容易に思ひ至らざる所にして遊跡僅に數十里恰も箱庭の眺めに滿足して窮屈至極なりと云はざるを得ず西洋人が常に遠遊を好むの風あるは今更ら云ふまでもなけれども彼の瑞西國は山水の明媚なる空氣の清涼なる歐洲中に其類を見ざる所なりとて夏期に至れば避暑の遊人諸國より集り中には遠く大西洋を渡りて米國より來るものも少なからずと云ふ又上海香港その他東洋に居留する外客が年々避暑の爲め日本に來遊するもの多きは現に世人の知る所にして所謂箱庭的の旅行と同日の談に非ざるを知る可し今我國人も既に暑中旅行の必要を知る以上は少しく其遊跡を廣くして遠きに出づるの工風みそ肝要なれ心身の愉快は無論みれが爲めに間接に益する所も決して尠少ならざる可し目下國內の交通は甚だ便利にして遊意一たび動けば南端北邊意の到る處即ち足の到る處なれども更に眼界を外に轉ずれば上海なり香港なり其他支那朝鮮の諸港なり又は浦鹽斯德なり何れも我定期航海線路の通ずる所にして往復の度數も少なからず尚ほ少しく遠きを望めば大平洋對岸の北米大陸その航程僅々十數日に過ぎざれば往復滯在に二個月を費して壯遊を試るが如き最も妙なる可し或は遠遊の企、妙ならざるに非ざれども內國の旅行と違ひ費用の多きを如何せんとの掛念もある可しと雖も今の避暑旅行の有樣を見るに一般に贅澤虛飾を裝ひ旅中尙ほ紳士風の邊幅を張りて錢を貪らるゝ由なれば海外壯快の遠遊は溫泉海水浴の留連に比して却て手輕に濟むの奇談もある可し或は又避暑の旅行は多くは家族を同伴して其樂を共にするものなれども日本の婦人は遠遊を好まざるが故に海外の旅行などは到底行はる可らずとの故障もある可し尤もなる說にして止むみとなくんば家族は家族にて國內の近遊を爲し男子は男子にて海外の遠遊を試みるも其樂を共にするの點に於ては變る所ある可らず況んや歸來一室の內に團欒して互に其見聞を談ずるとき談緒百出して其愉快いふ可らざるものあるに於てをや遠遊の企は家族云々の故障を以て抹殺す可きに非ざるなり思ふに此種の遠遊は眞の漫遊にして且その時日も短しと雖も見聞する所は一々新奇にして自から人々の知識を廣むる其利益は必ず少小ならざるものある可し苟も避暑旅行の閑と金とを有するものは奮て遠遊の企あらんみと我輩の敢て勸告する所なり

左の一編は倫敦發行アタランタ雜誌中の一節を翻譯したるものなり此一節は福澤先生の令孃たき子が英語作文の課業に認めたるを敎師の手より本國へ送りしものと見え右の雜誌に掲載せられたり末文雜誌記者の論評に日本女子の心事の順良なる英女子をして之を學ばしめ利益ある可しとの一語は我教育社會に於て特に注意す可き所のものなり

時事新報記者誌

日本女子の生活

日本上流社會女子の生活は今正に大變革の時に際し即ち閉居より自由に移るの時にして殆んど標準なきものなり其敎育の風とても樣々にして何れを夫れと記すみとさへ易からず或は寄宿學校に入る者あり又或は一切學校には入らずして自宅に敎師を招きて學ぶ者あり此種の女學生は大抵皆英語を稽古する中にも自宅修業の者は音樂幷に針仕事を以て課業の大切なるものとす二十餘年前まで女子の敎育は甚だ不行屆にして文學などは先づ以て不用なりとせしものが今は則ち然らずして前記の如く生活の大變革と云ふ可し

敎育の模樣凡そ右の如くにして十七八歲にもなれば音樂針仕事は格別、他の文學脩業は之を廢するの常にして（寄宿學校の女生徒は二十又は二十五歲までも學ぶ者あり）其前後母に從ひ集會宴會に出席し或は友達の家を訪ふみとあれども自身の傍に年少き人の在るにあらざれば餘り多辯に話すみともなし會食の席などに於て少年男子に近く座を占るみとあるも默して言はず男子より先づ發言すれば始めて談話の端を開き或は音樂の事、芝居の事、又は旅行中の見聞など四方八方の物語に遠慮せざるの常なり食事終りて膳を下げるか又は別間に誘はるゝとき稍や年長の婦人には烟草を喫して談話する者あり婦人は何處へ行くときも烟草入と烟管とを携へ烟管も美にして優しければ烟草入も亦縫取などして頗る美麗なるものなり故に眞實烟草を好まざるも唯一種の飾として之を携ふる者さへあり

右等の記事は姑く擱き英國の讀者は日本女子の婚姻法を聞て之に意を注ぐみとなる可し日本の女子は歐洲の女子に異なり常に男子に交際せざるの風にして敢て之を禁ずるものはなけれども年少き女子が勝手次第に年少き男子に面會して談話するみとは甚だ稀なり其面會は唯宴會等の席のみにて席上には必ず年長婦人の之に伴ふ者あらざるはなし思ふに此習慣は封建時代に行はれたる風俗より來り當時男女の別、最も嚴重なりし其遺風なる可し斯る次第なれば男子より女子に向て直に申込む可き機會なきは勿論なるが故に兩親が娘の爲めに謀りて最早や結婚の年頃なりと思へば其知人と相談し適當なる配偶を撰ぶみとなり

日本の風俗習慣を知らざる人は右の次第を聞き日本にては兩親が自分等の意を以て娘の婚事を自由にし本人の了簡如何に就ては全く無頓着なりと思ふものもあらんかなれども事實は全く之に異なり假令ひ兩親が誰れと指名しても本人の氣に進まざるときは兩親に於ては苟めにも之にて滿足せよと命令し勸告するの權力あるみとなし唯第二の相手を人撰して本人に相談するみと前の如くし遂に其意に適ふ者を求るのみ故に實際に於ては恰も女子が自から擇ぶに異ならず唯兩親が是れならば好からんと思ふ所の幾名を持出し其幾名の中にて撰定するまでのみとなり長者は少者よりも世故に慣れて何事に就ても知る所博し、云ふまでもなきみとなれば日本の女子は此風の結婚法に從て躊躇する者なし

千八百九十一年七月二十日　福澤たき

年少き日本の女子に斯くも從順温良にして父母を重んずるの心あるは殊勝の事なり英國の姉妹の或る部分にても此風に傚ふて必ず利益ある可し

エルチーミード

雜報

○法官懲戒裁判の判決　昨日の紙上に記せし通り豫て世評囂しかりし大審院判事の骨牌遊戲に關する懲戒裁判は一昨十二日の午後に至り愈々判決あり被告諸氏は遂に免訴となれり即ち判決文の寫しは左の如し

判決謄本

被告人　大審院長判事　兒嶋惟謙
同　大審院判事　中定勝
同　同　栗塚省吾
同　同　加藤祖一
同　同　高木豐三
同　同　岸本辰雄
同　同　龜山貞義

當裁判所は撿事總長松岡康毅が被告等は金錢を賭し博奕を爲し判事懲戒法第一條第二號に該るべきものたるに付き同法第十二條の罰に處せらるべしとの申立に係る懲戒事件に付受命判事芹澤政温木下哲三郎の下調を充分なりと思料し其取調たる證人三好退藏南部甕男兒玉淳一郎高木秀臣今井良一近藤鎰三應當融磯部四郎桐原イシ山田ヘル小木ヨネ河野タケ柴田ヘナ小嶋シホ松室エイ小澤カチ織田タマ山路ハナ桐原コウ齋藤ハル伊藤キン山崎スヽ神谷榮藏の調書其他客人入船帳の謄本等一切の書類及撿事の意見書を閱し之を審案するに被告等は金錢を賭し博奕を爲したりと認むべき證憑一も之れ無きを以て隨て判事懲戒法第一條第二號に適するの非行なきものと判定す依て同法第二十七條第一項末段に從ひ各被告人に對し免訴する者也

但東京地方裁判所撿事正野崎啓造の囑托に依り警視廳巡查本部に於て取調べたる桐原イシ外十七名の調書は法律に依らざる訊問に成立たる無効のものなるを以て本件審理の材料に供せず

明治二十五年七月十二日大審院に於る懲戒裁判所に於て

懲戒裁判所長　判事　原田種成
懲戒裁判所　判事　箕　元忠
同　判事　本尾敬三郎
同　判事　寺嶋　直
同　判事　安居修藏
同　判事　増戶武平
同　判事　岡村爲藏

原本に依り此謄本を作る者なり
明治二十五年七月十二日大審院に於る懲戒裁判所に於て

書記　西牟田豐親

右の判決は最終の判決にして更に上訴す可らざるものなれば此にて同事件も一段落を告げたりと云ふべし尤も同裁判の結果として警視廳にて藝妓の一類を取調べたる其手續に就て或は當事者に對し多少の云々を生ずるみともあるべく又今回の反動として撿事總長に對する種々の批難も起るべ
まり孰れも法事に關す
同裁判所の處置に就て
めに如何ともするみと
院長を除くの外被告た
勸せしよし

○英國總撰擧の準備
見書大要は昨日の紙上
ぬるに聯合自由黨の領
二十四日夕刻より英
て演說したり元來同市
總撰擧の折までは常に
ども其後の補欠撰擧に
たる程なれば近頃は同
傾むきしが故に保守黨
黨を惡むが故にや流石
爲めに殆んど口を開く
登りて數言を發するや
トーン氏の名を呼び三
所より叱咤罵詈するも
進み之を止めんと怒
後ろに控へし過激黨の
果は場中にて摑み合
召び寄せ凡三十分間
は再び口を開き凡そ五
を繼ぎて自由主義は
らずと云ふや否や不
騷動を始め氏を目掛
て氏には當らざりしか
を追ひ出さんと其趣を
七人を見付けたれども
しかば所論の要旨を書
動を鎭んが爲めに心を
るものと見え氏は太く
けられて馬車に乘りた

愛蘭の騷動　愛蘭の
日夜同地の國會議員
チル反對派の集會を催
きたるを以て會場に押
チル派のもの數百名
が如し尙は知らざる
ども遮り止めて許さ
來合せたる反對派の
て大騷動となれり兼
と決し居たる巡查六
棒を揮ふて種々制す
して敲き合ひ又其騷
は二三千人もあるべ
りければ更に百五十名
するを得たり此際双
名に及びしとぞ

○スタンレー氏の失敗
を擧げたるスタンレー
ース　ランベスの候補
區に於て演說したるに
妨げられて中頃は餘
云ふ所を知らず氏の